

## E・シュタードラーの「魂の故郷エルザス」の詩

三浦 安子\*

---

本論文は、ドイツの初期表現主義抒情詩人エルンスト・シュタードラー(1883-1914)の2篇の詩「ここに魂のふるさどがある」と「グラツィア・デイヴィナエ・ピエターテイス……(神の恵みサヴィナと共にあれ)」の文体分析並びに解釈である。この2篇の詩は、シュタードラーが1914年10月に31歳で、第1次世界大戦で戦死する10ヶ月前に上梓された詩集『出発』の末尾に置かれている作品で、この2篇を分析することによって詩人の死の前年の人生観や自然にたいする思いを探ることが出来る。この2つの詩は、この詩人が故郷アルザスの風光とストラスブール大聖堂南面のうなだれた女像の中に、近代都市文明の中で労働と疎外によって生命力と人間性を喪失した、20世紀初頭のヨーロッパ人の「人間回復」の手がかりを見出していることを示している。真に人間らしい生を営むために必要なもの、それは、大自然の生命力と、打ち砕かれた謙虚な魂のありかたである、と詩人はうたう。

キーワード：初期表現主義抒情詩、文体分析、大自然の生命力、謙虚さ、人間回復

---

### 目次

1. 故郷エルザス
2. 「ここに魂のふるさどがある」
3. 生の肯定

## 1. 故郷エルザス

エルンスト・シュタードラー(Ernst Stadler 1883-1914)は、ドイツの初期表現主義抒情詩人の一人

---

\*人間科学総合研究所研究員・東洋大学経済学部

としてドイツ文学史上に名をとどめている詩人である。彼は、ドイツ帝国領であったエルザス<sup>(1)</sup>のホルマルに生まれ、シュトラースブルク大学、ミュンヘン大学を経て、オクスフォード大学に留学し、就職論文「ヴィーラント訳シェークスピア」を母校シュトラースブルク大学に提出して比較文学者としての歩みを始めた少壮学者であった。彼は1910年秋に、ブリュッセル自由大学に専任講師として赴任して、ドイツ文法と、中世・近代ドイツ文学をフランス語で講義するかたわら、詩や評論の仕事にも本格的に取り組み始めた。その矢先、第1次世界大戦が勃発。直後に動員されて、1914年10月30日に31歳の若さでイギリス軍の砲弾に斃れた。

詩集『出発 (Der Aufbruch)』は、この学者詩人の生前に公刊された2冊の詩集のうち、彼の代表的な詩を集めた最後の詩集である。この詩集の刊行年は1914年となっているが、[Stadler, E., 1954, II p.250] この年の10月に彼は戦死したのである。

この、『出発』詩集に収録されている詩の第1グループ「逃走 (Die Flucht)」では、新ロマン主義的な形式美追求からの離反と表現主義的な生活感情の目覚め、すなわち真の現実に向かい向おうという意志そのものが素材とされている。その意志と新生の昂揚感が、第2グループ「数々の駅 (Stationen)」においては宗教的感情にまで高められた官能の世界への耽溺という形で表現されている。続いて第3グループ「さまざまな鏡 (Die Spiegel)」には、動力機械の代表選手であり、近代文明の象徴でもある「汽車」が力動的に活写されると同時に、その同じ近代文明の暗黒面ともいべき大都市生活者の貧困、不潔、絶望が、一切の装飾を捨て去った散文に近いスタイルで描写されている。この第3詩群は、第1、第2グループで示された「現実への自己投与」という詩人の意欲が、具体的に作品化されたものといえよう。詩集『出発』の諸作品は概略このような順序で配列されてきている。

詩集『出発』の終結部である第4詩群には、「憩い (Die Rast)」という標題のもとに、8篇の詩が収められている。そのうちの6篇はシュタードラーの故郷エルザス地方の風物を歌ったものであり、他の2篇は歴史上の人物に語らせるという形式の詩である。この2篇「ヘルラート」および「グラツィア・デイヴィナエ・ピエターテイス…… (神の恵みサヴィナと共にあれ……)」も、素材はすべてエルザス出身の人物および彫刻なので、この第4グループ全体が、シュタードラーの故郷に関する詩であるといってよい。

また、8篇のうち、「夕方の川 (Fluß im Abend)」は1912年1月22日付の『行動 (Die Aktion)』誌に掲載されたのち、1912年8月26日刊行の『文芸展望 (Literarische Rundschau)』に転載されたが、これ以外の7篇はすべて『出発』詩集に初めて発表された作品で、「憩い」と題されたこの詩群は詩人の死に最も近い時期の作品群といえる。

本稿では、この詩群を書いて1年足らずで、31歳を一期として戦死する運命にあった詩人が、その死に最も近い時期に何に注目し、何を「最も大切なもの」として歌っているのかを、「憩い」に収録されている8篇の詩から探っていくことにする。

## 2. 「ここに魂のふるさとがある」

第4グループ「憩い」の冒頭に「ここに魂のふるさとがある (Hier ist Einkehr)」という作品が置かれている。まず最初に、原詩と日本語訳を掲げることしよう。

[原詩]

HIER IST EINKEHR.

Hier ist Einkehr. Hier ist Stille, den Tagen und Nächten zu  
 lauschen, die aufstehen und versinken.  
 Hier beginnen die Hügel. Hier hebt sich, tiefer landwärts, Gebirge,  
 Kiefernwälder und durchrauschte Täler.  
 Hier gießt sich Wiesengrund ins Freie. Bäche spiegeln gesänftigt reine Wolken.  
 Hier ist Ebene, breitschultrig, heftig blühend, Äcker, streifenweis geordnet,  
 Braunschollig, grün, goldgelb von Korn, das in der Julisonne reift.  
 Tag kommt mit aufgefrischtem Himmel, blitzend in den Halmen;  
 Morgen mit den harten, kühlen Farben,  
 Die betäubt in einen brennendgelben Mittag sinken — grenzenlose  
 Julisonne über allen Feldern,  
 In alle Krumen sickernd, schwer ins Mark versenkt, bewegungslos,  
 In langen Stunden weiland, nur von Schatten überwölbt, die langsam weiter laufen,  
 Sich stricken und entzündet in das violette Farbenspiel des Abends wachsen,  
 Das nicht mehr enden will. Schon ist es Nacht, doch trägt die Luft  
 Mit Dämmerung vollgesogen noch den lichten Schein,  
 Der tiefer blühend auf der Schwingung der gewellten Hügelränder läuft —  
 Schon reicht unmerklich Frühe an die Nacht der weißen Sterne.  
 Bald weht aus Büschen wieder aufgewirbelt junges Licht.

Und viele Tag und Nächte werden in der Bläue auf- und niedersteigen,  
 Eintönig, tief gesättigt, wunschlos in der großen Sommerseligkeit —  
 Sie tragen auf den schweren sonngebräunten Schultern Sänftigung und Glück.

[Stadler, E., 1983, p.177]

## [日本語訳]

ここに、魂のふるさとがある

ここに魂のふるさとがある。ここに静寂がある、起きては沈む日々夜々に耳傾ける静寂が。

ここから丘が始まる。ここから台地に沿って深く、山が、松林とざわめく谷間とが現れる。

ここで牧草が野原へと流れ込む。幾筋もの小川が清らかな雲をやわらかに映している。

ここには小高い台地があり、肩幅ひろく、花は咲き乱れ、縞模様の耕地があって

茶色、緑、<sup>きん</sup>黄金色の穀物が7月の太陽に照らされて実っている。

日は生氣あふれる空とともに到来し、穀物の茎の中で稲光る。硬く、ひんやりした色彩の朝、

その色は燃える<sup>きん</sup>黄金色の昼の中に麻痺しつつ沈む一野原には無限の7月の太陽が

沃土全体に滴り落ち、芯へ重く沈み、身動きもせず、

長時間たゆたって、影に覆われているだけだが、その影はゆっくりと先へ走り、

身をのぼし、夕方の赤紫色の戯れのなかで火がつけられ、成長し、

その戯れはいっかな終わろうとしない。もう夜だ。しかし空気は

夕暮れをたっぷりと吸い込んでまだ薄明かりを帯びており、

その輝きは波打つ丘の縁の曲線上を花開きつつ走ってゆくー

すでにいつのまにか白い星々の夜に朝が届く。

まもなく灌木の茂みから再び若い光が渦をまきながら輝き出す。

そして、多くの日々と夜々が青空のなかで昇ったり沈んだりする、

単調に、深く充たされて、偉大な夏の至福のなかで何も望まず――

これらの日々夜々は重く日焼けした肩にやすらぎと幸福を担っている。

これは一幅の風景画である。丘、山、松林、谷間、牧場、小川、清らかな雲、台地、そして畑地。畑地は肩幅ひろく (breitschultrig)、咲き乱れて (heftig blühend)、土は茶色、穀物は緑と<sup>きん</sup>黄金色である。これらすべての風物は、7月の太陽の下で刻一刻と実りつつある。この詩の1行目から5行目の終りまでは、まず、風景全体が展望される。

この風景画はしかし一瞬も静止しない。7月の朝は硬く、ひんやりとした色彩で明け、やがて燃える<sup>きん</sup>黄金色の真昼となる。そして夕方になれば赤紫色に変貌する。夕暮れ。あたりの空気は薄明に充たされ、ゆれながら闇を深めてゆく。と思うまに、白い星の夜ははや明けそめ、灌木の茂みから、「若い光」、すなわち新たな一日の始まりの光が射し込んでくる。以上、6行目から15行目までの10行では、夏の一日の<sup>とき</sup>刻の移りゆきが、色と肌触りの変化を通じて歌われている。

最後の3行には、この風物、この時間の流れが、「単調で」ありながら「深く充たされていて」、その身をおいている詩人は、何の欲望にとらえられることもなく、心は鎮まり、いま、幸福そのもので

ある、という。

「シュタードラー著作集」第2巻末尾の注の中で、編者 K.L. シュナイダーは、次のように解説している。[Stadler, E., II p.275]

「ルネ・シッケレは自分用の『出発』詩集のこの詩の箇所に Gebweiler (ゲープヴァイラー) というメモを書き込んでいる。この上部エルザスの郡長所在地は、詩人がしばしばその地にある兄の家で休暇をすごした土地であるが、シッケレのこのヒントからして、この、『憩い』の冒頭に置かれている詩の風景は特にゲープヴァイラーを歌ったものであるとみなされる。」(Stadler, E., II p.275)

この作品は先にも述べたとおり、詩集『出発』において初めて発表されたものの一つであり、シュタードラーの死に最も近い時期の作品であると推定される。シュナイダーの上の注を考慮しつつ、もう一度この詩を最初から詳しく読んでいくことにしよう。

冒頭から4行目までの6つの文が、すべて「ここに (hier)」という副詞でもって始められているという点がまず目を引く。「ここに魂のふるさとがある。ここに静寂がある、……」という第1行目からすでに、疲れきった人間が、憩いの地のやっとたどりついた時に発する安堵の嘆息のようなものが感じ取れる。「やっとたどりついた。ああ、やっとこの地にやってくることができた。ここでこそ憩うことができる。こここそが、自分が本当の自分を取りもどせる場所、真の魂のふるさとだ。」という深い感懐が、この短い2つの文にこめられているといえよう。その地とは、心に何の悩みもなかった少年時代を過ごした土地、7月の太陽がさんさんと降り注ぎ、花が咲き乱れ、穀物が黄金色に実り輝く上部エルザスの地である。そこでは朝が昼に、昼が夕に、そしてまた朝が何のかげりもなくゆったりと移ろっていく。欲望、その実現し得ぬ悩みや焦慮など一切の苦しみがなく、大自然が、刻一刻と、充実した一日を悠然と運行していく世界。ここにこそ、真の安らぎの地があるのだ、と詩人は歌う。思想の闘いに疲れ、都市生活者の現実を知り、第一次世界大戦勃発の不吉な予感にさらされて生きねばならなかった詩人が、故郷の明るい夏の日に思いをさせ、そこに安らぎを見出そうとしている姿がこの詩から浮かびあがってくる。

さきに、この第4グループ「憩い」に収録されている作品のうちの6篇は、すべて詩人の故郷エルザスの風物を歌ったものであると述べたが、これら、故郷の讃歌ともいべき作品群も、詳細に見ていくと、ほぼ3つに分類することができる。

その第1は、いま取り上げたばかりの「ここに魂のふるさとがある」のように、大自然の悠揚せまらぬ運行を讃美し、そこに安らぎを見出す、と言う内容のもので、大自然の生命力への讃歌である。「ぶどうつみ (Weinlese)」はこの部類に属する。

第2番目は「小さな町 (Kleine Stadt)」である。この作品においても、「ここに魂のふるさとがある」と同じく、前半では美しい緑野、畑、ぶどうの繁る山々、松林等が描かれるが、後半部では次のような光景が歌われる。

.....

夕方、工場が終りになると、大通りは人でいっぱいになる。  
ひとはみなゆっくりと歩き 路地の真中にたちどまっているひともいる。  
みな仕事と機械の煤でうすよごれている。けれども彼らの瞳は  
今もお土と大地の強靱な力と野原のすばらしい光とを宿している。

先の「ここに魂のふるさとがある」とは異なって、ここにはもうすでに近代工業文明の暗い影が色濃く立ち現れて来ている。が、「機械の煤でうすよごれた」人々の瞳は、まだ土のにおいと大地の強靱な生命力とを宿している。つまり、ここにはまだ近代工業文明に征服されきっていない、大地に密着した健康な人間が生きているのである。第1にあげたものほど完全な自然への讃歌ではないが、ここでもまだ自然の生命力が優位を保っている。

これに反して、「夕方の川 (Fluß im Abend)」、「重たい夕方 (Schwerer Abend)」、「庭のばら (Die Rosen im Garten)」の3篇には、「ここに魂のふるさとがある」や「ぶどうつみ」に見られた積極的な自然讃歌とは反対に、自然の生命力が失われていくことへの詠嘆がうたわれる。「夕方の川」には「嵐を帯びた太陽」、「荒れた牧草地」、「嵐を帯びた光」、「にごった浅瀬」などの表現が用いられており、次の1行でこの詩は終わっている。

私の最も深い幸福が緑の岸を通して 雷の燃えさかる夕方へと走り去るような気がする。

また、「重たい夕方」では、「闇」、「影」、「黒い十字架」、「暗い畑」、「陰気な」、「冷たい風」等の無彩色の単語が重なりあい、最後に、「雷がごろごろ鳴り響きながら落ちてきて、最後の光がガラスになる。」と、一切が生命を失って、無機物化して行く有様がうたわれている。

「庭のばら」の終結部も、「重たい夕方」と同様、死が暗示されている。

その野性的な咲き方は死に際にのどを鳴らす声のようだ、  
その声を過ぎ行く夏が秋の不確かな光のなかへ連れ去る。

以上のように、「憩い」に収録されている6篇のエルザスの風物を歌った詩を内容に従って更に分類すると、2篇は大自然の生命力の讃歌、1篇は大自然の生命力と近代文明の工業力との並置、そして残りの3篇は大自然の生命への挽歌となっていることが分かる。

このように、大自然への讃歌と挽歌とが並存しているという点に、詩人シュタードラーの自然観と生命観の一つの大きな特徴が看取され、彼が「過渡期の詩人」(コールシュミット) [Kohlschmidt, W., 1965, p.27] と呼ばれるゆえんといえよう。

詩人は詩集『出発』の第1グループ「逃走」の中で、次のように歌った。

あさがた目覚め、己が仕事を、己が日々の仕事を知り、……  
 ゆあみの後のごとく生き生きと、人生の中へと躍りこんでいく、暗闇の中を  
 あの大きいなる存在に自をゆだねて。 (「終焉 Ende」より)

このように、「現実の中へ自己を無限に投げ込もう」という意欲に燃える若い詩人の目に入ってきたものは、高度に発達していく機械文明の膨大なエネルギーの奔流と、都市の最下層者の貧困と汚辱だった。機械文明の発達にともなって、大地から切り離され、故郷を失っていく都市生活者の病的実態に気づかされた詩人が、あらためて思いをはせた世界。それは、太陽の光と花と穀物にあふれた7月のエルザスの大地であった。この、明るく、生気にみちた故郷の風物こそ、貧困と単純労働に疲れ、不安におびえる都市生活者にもう一度生命をあたえてくれるものだ、と詩人は思ったに違いない。第4グループの冒頭に置かれた「ここに魂のふるさとがある」は、ここにこそ救いがある、という詩人の実感と、ここにこそ救いを発見せねば、という詩人の切実な願望が、「ここに魂のふるさとがある」という断言の形をとって表現されたものと考えられる。この詩においては、「畑地 (Acker)」（ただしこの詩では複数形の Äcker が用いられている）や「土塊 (Scholle)」などの単語は、第1グループの詩「早春 (Vorfrühling)」でのように、人間の実生活の象徴として用いられているのではなくて、畑、土、という名詞の原義通りに使用されており、畑や大地の持つ根源的な生命力が暗示されている。

このように、極度に技術化が進んだ都市生活の空虚さと生命喪失の危機を感知した詩人は、本能的、直感的に生命回復の道を故郷の大自然の中に求めたのであるが、そこにおいてもまた生命力の回復はもはや到底望めないことを彼は知らなければならなかった。すでに、この生命回復の道の行き詰まりを、同時代の詩人ゲオルク・ハイム Georg Heym (1887-1912) は「都会の神 (Der Gott der Stadt)」や「さまざまな都会の悪霊たち (Die Dämonen der Städte)」において、大都会の終末絵図という陰惨な形で描いているが、「夕方の川」や「重たい夕方」においてシュタードラーもまた、ハイムのようにグロテスクなイメージは用いずに、ごく日常にみられる風景を静かに描写しながらも、失われゆくものへの強い愛惜と詠嘆、そして、未来へのそこはかとおびえを、表現せずにはいられなかったのである。

### 3 生の肯定

つぎに詩集『出発』の第4グループ「憩い」のうちの第2の部類、すなわち、歴史上の人物像を素材とする2作品を読んで見ることにしたい。

まずはじめに「ヘルラート (Herrad)」に簡単に触れたい。この詩は、1175年に「愉しみの庭 (Hortus deliciarum)」を著わし、1195年に没したエルザス地方のホーエンブルク尼僧院の院長ヘルラー

ト・フォン・ランズベルクの名を標題にした作品で、詩全体がエルザス地方一帯を見はるかす小高い岡の尼僧院の中での院長の独白という形式をとっている。3つの段落に分けられている 全20行のこの長行詩の内容は、次に引用する第3段落の初めから4行に要約されている。

そして私は決心いたしました、あらゆるこれらのことどもを、すなわちわたくしが  
 もう何十年もまえから  
 書物や森や人間の魂から、また孤独な時間から体験いたしましたことどもを、  
 またわたくしがこの地上の生で受けましたすべての善を  
 絵画にであれ文字にであれ、忠実に、たくみに、捉え、保管しておきましょうと。

この尼僧院長は尼僧院の中に隔絶されてはいたが、書物から「この世の愚かさや困窮、冗談や欺瞞、そして悩み」を知っていた。が、彼女にとって人生は「創造の奇蹟」であり、世界は「壮大」であり、生きることは「歓喜」であった。この「ヘルラート」全篇をおおっている感情の基調は、人生を肯定する静かな喜びである。

歴史上の人物像を素材としたもう一つの詩、「グラツィア・デイヴィナエ・ピエターテイス…… (Gratia divinae pietatis……)」は、第4グループの最後、つまり、『出発』という詩集の最後に置かれている作品である。この詩の題名は非常に長いもので、「神の恵み、サヴィナと共にあれ、その手によりて硬き石より彫られたる我は彫像としてここに立つ」という意味である。この長い表題の次に、更に「シュトラースブルクのミュンスターの古碑文」という副題が括弧にいれられて付いている。かなり長く、難解な詩であるが、ここに原詩と日本語訳を全文引用することにする。

[原詩]

GRATIA DIVINAE PIETATIS ADESTO SAVINAE DE PETRA DURA PERQUAM SUM FACTA  
 FIGRA (Alte Inschrift am Straßburger Münster)

Zuletzt, da alles Werk verrichtet, meinen Gott zu loben,  
 Hat meine Hand die beiden Frauenbilder aus dem Stein gehoben.  
 Die eine aufgerichtet, frei und unerschrocken –  
 Ihr Blick ist Sieg, ihr Schreiten glänzt Frohlocken  
 Zu zeigen, wie sie freudig über allem Erdenmüsal throne,  
 Gab ich ihr Kelch und Kreuzesfahne und die Krone.  
 Aber meine Seele, Schönheit ferner Kindertage und mein tief verstecktes Leben  
 Hab ich der Besiegten, der Verstoßenen gegeben.



Und was ich in mir trug an Stille, sanfter Trauer und demütigem Verlangen  
Hab ich sehnsüchtig über ihren Kinderleib gegangen:  
Die schlanken Hüften ausgebuchtet, die der locker Gürtel hält,

Die Hügel ihrer Brüste zärtlich aus dem Linnen ausgewellt,  
Ließ ihre Haare über Schultern hin wie einen blonden Regen fließen,  
Liebkoste ihre Hände, die das alte Buch und den zerknickten Schaft umschließen,  
Gab ihren schlaffen Armen die gebeugte Schwermut gelber Weizenfelder, die in Julisonne schwellen,  
Dem Wandeln ihrer Füße die Musik von Orgeln, die an Sonntagen aus Kirchentüren quellen.  
Die süßen Augen mußten eine binde tragen,  
Daß rührender durch dünne Seide wehe ihrer Wimpern Schlagen.  
Und Lieblichkeit der Glieder, die ihr weiches Hemd erfüllt,  
Hab ich mit Demut ganz und gar umhüllt,  
Daß wunderbar in Gottes Brudernähe  
Von Niedrigkeit umglänzt ihr reines Bildnis stehe.

[Stadler, E., 1983, p.185]

グラツィア デイヴィナエ ピエターテイス アデストー サヴィナエ デー ペトラ  
ドゥーラー ペルクアム スム ファクター フィグーラー [神の恵み、サヴィナと共にあ  
れ、その手によりて硬き石より彫られたる我は彫像としてここに立つ] (シュトラースブルク  
のミュンスターの古碑文)

最後に、わが神を讃美する為のすべての仕事を成し遂げた時に、  
私の手は2体の女人の像を石で建立した。

1体の女人像はのびのびと大胆不敵にすくと立った——  
彼女の眼差しは勝利であり、彼女の歩みは歡喜に輝いている。  
いかに彼女が嬉々として地上のあらゆる悲惨を支配しているかを示すために  
私はこの女人に杯と十字の旗と王冠とを与えた。  
だが、私の魂や、はるかな幼年時代の日々の美しさや、深く秘めた私の生を  
私は敗北した者に、しりぞけられた者に与えた。  
また、私が自分の内部に保っていた静けさや、穏やかな悲哀や謙虚な願いを  
私は憧れに満ちてこの女人の童女のような身体に懸けた。  
ゆるやかな広帯をしめたこの女人の細腰を私は彎曲させ、  
胸の隆起を麻布あさぬのから愛情込めて波打たせ

髪の毛を肩越しに<sup>きん</sup>黄金色の雨のように流れさせ  
 古い書物を折れた錫杖を握っている両手を愛撫し、  
 この女人の細い腕に7月の太陽の下で波打つ<sup>きん</sup>黄金色のうなだれた憂鬱を与え、  
 彼女の両足の逍遥には、日曜日に教会の扉から湧き出るオルガンの音楽を与えた。  
 甘い両眼はひとつの帯で覆わねばならなかった。  
 うすい絹を通して彼女の瞬きが、さらに大きな感動を与えるための風を巻き起こすために。  
 彼女の柔らかな下着を満たしている四肢の愛らしさを  
 私は謙遜をもって完全に覆った。  
 驚くほどに兄弟のように神に近く  
 心の低さの光に包まれて彼女の清らかな像が立つために。

この詩の内容の理解のために、K.L. シュナイダーが『シュタードラー著作集第2巻』に付している注が非常に参考になると思われるので、まず、この注を要約してみたい。

この詩の表題の意味はさきに述べたとおりであるが、この碑文は、シュトラスブルクの<sup>ミュンスター</sup>大寺院にはもはや現存していない。この碑文はもともと、ミュンスターの南面の二重の入口にあった12使徒像のうち一人が抱いていた箴言板に記されていたものである。これらの12使徒像は、1793年フランス大革命のさなかに、このミュンスターを「理性の寺院」にするという名目のもとに、他の多くの彫像とともに破壊されてしまったのである。シュタードラーのこの詩にうたわれている2人の女像は、エクレスシアとシナゴグの像であり、この2体の彫像もまた大寺院の南面入り口にあったのだが、破壊の当時、自然科学者ジャン・ヘルマンによって救出され、市の植物園内に隠されていた。更に、この詩の表題となっている碑文と、この2つの女人像との関係についていえば、ミュンスター伝説の中に、サヴィナが12使徒のみならずこの2体をも彫ったという説がある。しかし、シュタードラーがこの作品を書いた当時は、サヴィナは12使徒のうち1体を彫っただけであるという見解がほぼ確定的となっていた。にもかかわらず、シュタードラーは、ミュンスター伝説の方を採り、この詩の中で、サヴィナがこの2体の女像を彫ったように、サヴィナ本人に語らせている。

さて、この詩の解釈の鍵となるのは、この2体の女人像の形姿であるが、これに関しても、K.L. シュナイダーはこう述べている。

「キリスト教とユダヤ教とを表わすこれらの彫像は、二重の入口の外側の地点の左右に立っているものであるが、これらは新しい契約（団体）が古い契約（団体）に勝利したことを比喩的に表わしている。向かって左に立っている『勝利の教会（Ecclesia triumphans）』は、右手に堅く十字の杖を握りしめて、それを支えとして立っている。左手には杯を持ち、頭には王冠を戴き、誇らしげに左方のシナゴグの像を見やっている。他方、シナゴグの像の方は、頭をたれて立っており、両眼は眼帯で覆われている。右手に持った錫杖は何箇所も折れており、力なくたれさがった左手は、弱々しく律法の板を持っている。王冠は彼女の足下におかれ、彼女はただ軽い下着をまとっているのみである。この2

つの像の夫々の頭上の天蓋の下には碑文がかかげられている。エクレスシアの頭上には『キリストの血によりてわれは汝に打ち勝てり』、シナゴグの頭上には『その血、われを盲（めしい）にせり』と刻まれている。」(Stadler, E., 1954, I pp.279-280)

つまり、エクレスシア(=主にある教会の意)の像は、ユダヤ教を克服して西欧世界全体の宗教となったキリスト教の勝利の象徴であり、シナゴグ(=ユダヤ教の礼拝を執り行う会堂のこと)は、キリスト教に乗り越えられた、敗北の宗教の象徴になっているのである。

これまで引用してきたK.L.シュナイダーの注をまとめてみると、シュタードラーは、この2体の女像がサヴィナという女彫刻師によって彫られたものであるというミュンスター伝説にのっとって、その女彫刻師サヴィナの口を借りてこのエクレスシアとシナゴグという2体の女像についてうたう、という形式をとっていることが分かる。それでは、この詩のなかで、サヴィナは(すなわちシュタードラーは)この2像を素材として何を歌い上げようとしているのであろうか。

まず一読してただちに気づかされることは、この22行からなる詩のうち、エクレスシアをうたっているのは3行目から6行目までの4行のみで、7行以下残りの16行はすべてシナゴグをうたっているという点である。内容的に見ても、1行から6行までは導入部としての役割を果たしているのみで、この詩の真の内容は第7行目の「だが、私の魂や……」から始まるといってよい。すなわち、この詩は形の上からは、たしかに2体の女像をうたってはいるが、重点はシナゴグに置かれているのであり、本質的にはシナゴグの像をうたった作品といえる。

女彫刻師サヴィナは、2体の女像を彫るに当たって、自分の心の悲しみ、願いなど一切の心情、生命をこの敗北者たるシナゴグの像に託した、という。この敗北の女像は、それゆえほっそりとした腰、波打つ胸、流れる金髪を与えられ、静けさと憂鬱とオルガンの音楽の響きとを与えられた。眼帯や、薄い下着も、彼女の愛らしさを引き立たせるもの以外の何ものでもなく、その敗北せる姿は心の低さにつつまれており、それゆえに、彼女こそ神に最も近い存在なのだ、とこの女彫刻師は讃えるのである。

中世西欧世界はキリスト教全盛の時代であった。中世において「エクレスシア」は、まさに「勝利の教会」であった。彼らは天国ばかりでなく、この世の最高の権威と権力をも掌握していたのであるから。しかしキリストの教えの最大のものは、「心をつくし、精神をつくし、思いをつくし、力をつくして、主なるあなたの神を愛する」(新約聖書マルコによる福音書12章30節)ことであり、「自分を愛するように隣人を愛する」(同書12章31節)ことである。また、中世カトリックの教理で重要視された「徳目」が柔和と謙遜であったとすれば、そのキリスト教の象徴たるエクレスシアの像が、「勝ち誇って」、「すくくと立って」いるというのは矛盾ではないだろうか。教理的に、教团的に、民族宗教の域を越えることのできなかつたユダヤ教のシンボルであるシナゴグが、敗北の女像として立つとき、その打ち砕かれた姿の中に、「砕けたる魂を愛する」キリスト教の神の嘉賞し給う人間像が浮き彫りにされている、ということはなんという皮肉であらうか。

シュタードラーはしかし、この詩において、この矛盾や皮肉をあげつらい、諷刺しようとしたので

はない。そうではなくて、彼はこの2体の女像が担わされている歴史的な役割、勝者と敗者という役割を、ただ型どおりに理解することをせず、この2体の形姿にうちの、より人間的な姿を示している像に心を引かれたのであろう。筆者もこの2体の女像を1984年と2002年に実見したが、シュタードラーが敗北の女像を、心の低さに輝く純粋な像として称えたのは、謙遜を旨としたキリスト教の象徴であるエクレスシアの像が勝利を誇っていることの矛盾を突いて、キリスト教に批判の矢を放つためではなくて、ただ、打ち砕かれて、ひっそりと佇んでいる、いかにも優美なシナゴグの像に、真に人間らしい人間の姿を見出したからであろうとの実感を持った。つまり、詩人はこの敗北の女像に静けさ、もろさ、弱さを見出し、その姿から穏やかな悲哀、謙虚な願いを感じ取り、人間の魂を感知して、深く打たれたのである。

ここに、歴史的な素材をうたう際のシュタードラーの特徴が見出される。それは、既成概念にとらわれず、対象そのものに自己を直接ぶつけて、そこに自己の内部と感応するものを発見したとき、自由に対象を理解し、対象と自分との呼応を詩にする、という手法である。

『出発』詩集には、第1グループから第3グループまでにも歴史的素材を扱った作品が3篇あった。その1つは「箴言 (Der Spruch)」で、この詩の最終行にはアンゲルス・シレージウスの格言詩の一節が引用されている。この「箴言」においても、原典で用いられた意味とは異なる意味が、この引用句に与えられている。すなわち、アンゲルス・シレージウスの原典では「遁世」の意味で用いられている「本質的になれ」という命令が、シュタードラーによって、「現実の生と正面から向き合え」という意味に変えられているのである。

第2の例は、第3グループ「さまざまな鏡」に収録されている「聖杯城前に佇むパルツィファル (Parzival vor der Gralsburg)」である。この詩の中で、聖杯を逸したパルツィファルに、次のような言葉が与えられている。

.....

汝の憧れを世界に投げ出せ！ 汝を町々が、人々が、そして海が待つ。行きて  
汝の神にひれ伏せ 神は汝に新たな苦難を備えたまえり。

立て！ 行け！ 出で<sup>い</sup>行け！ 広い世界へと！ 生きよ！ 仕えよ！ 耐え忍べ！

.....

そしてこの詩は「痛みの冠を受けた者にはじめて、聖杯は挨拶を送る」という言葉で終わっている。この詩全体の重点は、宗教性よりも、この世の義務と生活と苦悩を十分に体験し尽くすことこそが、聖杯の騎士たる資格である、という考え方におかれている。

最後に残った第3番目の作品は「ジンプリツィウスはシュヴァルツヴァルトの隠者となり自伝を書く (Simplicius wird Einsiedler im Schwarzwald und schreibt seine Lebensgeschichte)」である。

この詩の中で、隠者となったジンプリツイウスは、かつての、武勇を誇り、愛欲にひたった時代を回想し、「後悔もまた憧憬も、私の、かつてあったもので今はもう失われてしまったものどもを、貶めてはならない」といい、過去の一切の生を肯定して、平和に満ちた心境にある。これは、グリムメルスハウゼンの、「ジンプリツイウス」の後悔の場面とは正反対の姿に変えられている。

さて、これまで「グラツィア デイヴィナエ ピエターテイス……」をはじめとして、他の歴史上の素材を扱った作品4篇、計5篇を一通り見てきたのであるが、これら5篇の詩における歴史上の人物像の扱い方に共通しているのは、どの素材にたいしても、これまでの定説となっている解釈と異なった見方がなされている、という点であろう。その異なったという点を具体的にいえば、「ヘルラート」および「ジンプリツイウス」では、人生の肯定に重点が置かれていることであり、「グラツィア デイヴィナエ ピエターテイス……」では、真に人間らしい人間の姿が描きだされていること、そして「パルツィファル」と「箴言」では、現実の生に真正面から立ち向かい、現実をより広く、より深く体験せよ、という命令が語られていることである。

以上をまとめてみると、これら5篇の詩が、夫々異なる素材を扱いながら、表現していることはみな、現実の人生をあるがままに見、そのあるがままの姿をこの上なく尊いものと見る、という姿勢に立っていることがわかる。そしてシュタードラーは、このように、あるがままの姿で生きていくことこそ真理だと信じている人間像に深い共感を覚えているということが、これらの詩から読みとれる。

「あるがままの生を、そのあるがままの姿で美しいと見、善いと見る」というこの態度のことを、K.L. シュナイダーは「生の神聖視 (Heiligung des Lebens)」と呼んでいるが [Stadler, E., 1954, I p.86] この態度こそ、『出発』詩集全篇を一貫して流れている基調である。それは、汽車とか故郷の夏など、明るくて力強いものをうたうときにも、ユダヤ人街とか娼婦など暗く悲しげなものをうたう時にも一様に保たれている基本的な姿勢である。このような心持を根底に持っていた詩人であったからこそ、1910年代のヨーロッパの現実の明暗両面を、特定のイデオロギーや信条によって色づけすることなく、ありのままにうたい得たのであろう。 (2004.10.11)

## 注

- (1) 現在は「アルザス」「ストラスブール」のように表記すべきであるが、シュタードラーの一生は、アルザスがドイツ帝国領であった時代のものであり、作品もすべてドイツ語で書かれているので、本稿では、アルザス地方の地名の表記は全てドイツ語の発音に準拠した。

## テキスト・主要参考文献

Ernst Stadler/Dichtungen. Gedichte und Übertragungen mit einer Auswahl der Kleinen kritischen Schriften und Briefe. 2 Bde. Eingeleitet, textkritisch duruchgesehen und erläutert von Karl Ludwig Schneider, Hamburg, Verl. Heinrich Ellermann, [1954]

Ernst Stadler Dichtungen, Schriften, Briefe. Kritische Ausgabe. Hrsg. von Klaus Hurlebusch und Karl Ludwig Schneider, München, Verl. C.H. Beck, 1983

Werner Kohlschmidt: "Die Lyrik Ernst Stadlers." In: Der deutsche Expressionismus/Formen und Gestalten. Hrsg. Von Hans Steffen, Göttingen, Vandenhoeck & Ruprecht, 1965.

## E. Stadlers Gedichte über Elsaß

MIURA Yasuko\*

---

Ernst Stadler wurde 1883 in Elsaß (damals in Deutschland, heute in Frankreich) geboren und ist 1914 mit 31 Jahren auf dem Schlachtfeld des ersten Weltkrieges gefallen. Er ist als einer der bedeutendsten Lyriker des Frühexpressionismus Deutschlands angesehen. Die vorliegende Untersuchung ist eine Textinterpretation für zwei Gedichte Stadlers: "Hier ist Einkehr" und "Gratia divinae pietatis...". Durch diese Interpretation konnte man die Welt- und Lebensanschauung des Dichters in seinem Todesjahr herausarbeiten. Stadler hat mitten im Licht und in der Luft der elsässischen Landschaften Lebenskraft und Identität des Menschen gefunden. Die Natur seiner Heimat und die demütigende Haltung der Synagoge-Statue vor dem südlichen Portal des Münsters haben dem Dichter eine Hoffnung auf das Wiedergeburt der Menschlichkeit gegeben.

**Stichwörter (Key words)** : Frühexpressionistische Lyrik, Textinterpretation, Lebenskraft der Natur, Demut, Wiedergeburt des Menschlichkeit

---

---

\* A professor in the Faculty of Economics, and a member of the Institute of Human Sciences at Toyo University